人間科学研究　第20巻 第１号　１－10（2007）

原 著 論 文

社会的場面における解釈バイアスが状態不安に与える影響

五十嵐　友　里*,**　　木　下　克　久***　　嶋　田　洋　徳****

The influence of interpretative bias on state anxiety in social situations

Yuri Igarashi*,**, Katsuhisa Kinoshita***, Hironori Shimada****
(*Graduate School of Human Sciences, Waseda University,
** The Japan Society for the Promotion of Science,
***Chugai Pharmaceutical Company and
****Faculty of Human Sciences, Waseda University)
(Received : September 15, 2006 ; Accepted : November 29, 2006)

Abstract

It has been reported that social anxiety is influenced by interpretative bias. However, studies that have examined interpretative bias in social situations have produced inconsistent results. Hirsch and Mathews[10] defined "on-line" interpretations as interpretative inferences that are made at the time ambiguous information is first encountered. The present study investigated this "on-line" interpretative bias in social anxiety separate from the “off-line” system. Although it has been suggested that interpretative bias is a factor in maintaining social anxiety, the cause-effect relationship between the two remains unclear. Therefore, this study also investigated the influence of interpretative bias on state anxiety in social situations. Participants were undergraduate students (n=19) who were divided into high and low social anxiety groups.Each student gave a speech and then provided open-ended responses regarding the behavior of the audience. The students also rated their state anxiety after giving the speech. The present results indicated that participants who were not socially anxious interpreted the behavior of the audience in a neutral fashion; however, socially anxious participants negatively interpreted the behavior of the audience. Further, it was suggested that high social anxiety participants felt more anxiety after the task. These results suggest that interpretative bias influences state anxiety.

Key Words：social anxiety, on-line interpretative bias, off-line interpretative bias

*早稲田大学大学院人間科学研究科（*Graduate School of Human Sciences, Waseda University*）
**日本学術振興会（*The Japan Society for the Promotion of Science*）
***中外製薬株式会社（*Chugai Pharmaceutical Company*）
****早稲田大学人間科学学術院（*Faculty of Human Sciences, Waseda University*）

【問　題】

社会不安障害の維持に関して、これまでさまざまな研究が行われてきた。特に、近年、認知行動療法で扱う社会不安における認知の歪みについて詳細な知見が得られてきている。Clark & Wells[1] やRapee & Heimberg[2]は、社会不安障害の認知モデルを検討し、情報処理のバイアスが社会不安の維持要因として機能することを示唆しており、その後さまざまな実証的な検討が行われてきた。

たとえば、Amir, Foa, & Coles[3] や Stopa & Clark[4] は、社会不安障害と「解釈バイアス」を取り上げて検討を行っている。解釈バイアスとは、あいまいな刺激をネガティブに解釈しやすいことをさす。ここでいう「あいまいな」とは、ポジティブでもなく、ネガティブでもない多義的な場面を指しており、刺激そのものはあいまいであるにもかかわらず、社会不安の高い者は社会的な出来事をネガティブに解釈してしまうことが明らかにされている。

従来の「解釈バイアス」の検討においては、同音異議語課題や、語彙決定課題、文章で呈示されたシナリオに対する解釈を求められる課題の３つの方法が用いられてきた。同音異議語課題では、同じ音を持つものの語の意味が異なるという同音異議語課題を用いて多義的な刺激に対する解釈が測定される（たとえば、「ダイ」という音刺激に対して「DIE/DYE」のどちらで反応するかを測定する）。また、語彙決定課題は、あいまいな文章（プライム刺激）の後に単語を呈示し、それが有意味語か無意味語かを判断させる（語彙決定）課題であり[5]、その判断に要する反応時間によって解釈が測定される。しかしながら、これらの研究方法では、日常生活におけるこれまでの学習内容が反応に影響を与えたり、予め調査者によって呈示される解釈の中から選択させても、その選択肢に実際に被験者が解釈した内容が含まれていない可能性が残るなどの限界がある[6]。金井・笹川・陳・嶋田・坂野[7]や五十嵐・嶋田[8]は、このような生態学的妥当性に関する問題点の改善を目指し、より現実場面に近いビデオ課題やスピーチ課題を用いた検討を行い、社会不安と解釈バイアスとの関連性を確認している。

このような社会不安と解釈バイアスの関連を検討した研究結果を概観すると、いくつかの研究知見が混在している。Amir et al.[3] やStopa & Clark[4] は、文章で呈示されたシナリオに対する実験者による解釈を実験参加者に与え、その解釈を参加者が評定することで社会不安と解釈バイアスを検討している。その結果、社会不安障害者には「あいまいな社会的な出来事をネガティブに解釈しやすい」という解釈バイアスが生じることを示している。また、非社会的な（対人場面以外の）出来事に対する解釈についても同様に検討しており、非社会的場面では同様の評価が見られないことから、社会不安における解釈バイアスは社会的状況に対する状況特異的なもの（対人場面においてのみ生起）であることが示唆されている。

一方、Constans, Penn, Ihen, & Hope[9] も同様にシナリオを呈示することによって検討を行っており、むしろ社会不安の高い者は社会的状況に対するポジティブな解釈ができないということを示唆し、ポジティブな解釈の欠如こそが社会不安の維持に影響していると指摘している。また、金井ら[7] は、社会不安の高い参加者は、他者のあいまいな行動に対して中性的に解釈することが少ないことを示している。

そこで、Hirsch & Mathews[10, 11]は、測定される「解釈」を“オンライン”の解釈と“オフライン”の解釈の２つに区別することを提案している。“オンライン”の解釈とは、その状況に初めて遭遇した時点におけるあいまいな状況について、その状況の持つ刺激に基づいて行われる解釈のことをさす。一方、“オフライン”の解釈は、その状況の刺激を用いず、回顧的にもたらされる判断によって行われる解釈のことであるとされる。

この観点に基づいてHirsch & Mathews[10] は、社会不安障害は有しないものの、面接に対する不安の高い参加者と低い参加者に対して実験を行っている。この実験では、就職の面接の場面に関するシナリオを用い、実験参加者に自分自身があたかもそこに参加しているように想像することを求めることによって、“オンライン”の解釈を検討した。その結果、面接に対する不安の低い参加者は“オンライン”の解釈バイアスがポジティブに特徴づけられたのに対し、面接に対する不安の高い参加者は“オンライン”の解釈が観察されなかった。この研究においては、直接的に社会不安の程度による解釈バイアスの差異を

検討したものではなかったが、対象を社会不安障害を有する臨床群と健常群に置き換えたHirsch & Mathews[11] の研究においても同様の傾向の結果が確認されている。

すなわち、社会不安が高い人は、刺激に遭遇した時にその刺激に即した“オンライン”の過程を踏むことができず、社会的状況においてその場で刺激を正確に判断できないために、回顧的な“オフライン”のプロセスによって、ネガティブな信念やイメージをもとに解釈してしまうと指摘している[10,11]。したがって、この知見から、社会不安の高い人が社会的状況で繰り広げられている事象に十分な注意を払えていないと理解することができる。また、Bond & Omar[12] は、社会不安の高い人は、経験している社会的状況において起きている出来事を符号化することが不安によって阻害され、その場で起きていることを記憶せずに社会的状況から離れてしまうと指摘している。同様に、Clark & Wells[1] も、社会不安の高い人は他者の反応をモニターしていない可能性があり、彼らの思考はデータ駆動型（現実に起きていることに対する合理的判断や思考）ではないと指摘している。

これらの観点を踏まえると、Amir et al.[2] や Stopa & Clark[4]、Constans et al.[9] は“オフライン”の解釈を測定していると考えられる[13]。また、金井ら[7]、Hirsch & Mathews[10,11] は“オンライン”の解釈を検討していると理解できる。しかしながら、それぞれの解釈に関して別々に知見を概観してもなお、どの感情価の解釈が社会不安を特徴づけているのかに関する研究知見はそれほど一致していない。

“オフライン”の解釈について、Amir et al.[2] や Stopa & Clark[4] では、社会不安とネガティブな解釈の関係性が示され、Constans et al.[9] は、社会不安にはポジティブな解釈の欠如が社会不安の維持に及ぼす影響を示唆している。そこで、Huppert, Foa, Furr, Filip, & Mathews[13] は社会不安とポジティブな解釈バイアスとネガティブな解釈バイアス、および、社会不安と併存しやすい抑うつや特性不安、状態不安との関連についてもあわせて検討を行った。その結果、ネガティブな解釈バイアスは社会不安との間のみに関連が認められ、ポジティブな解釈バイアスは社会不安ともわずかに関連があるが、それ以上に抑うつや状態不安、特性不安と強い関連があることを示唆した。したがって、Huppert et al.[13] の知見は、“オフライン”の解釈に関するこれらの一致しない知見を統合する示唆をしている。

一方、“オンライン”の解釈を検討した研究は、Hirsch & Mathews[10,11]、金井ら[7] の研究があるにすぎない。また、既に述べた実験的検討における生態学的妥当性が低いという問題点は、「社会不安が社会的状況を経験している最中に周辺環境に注意を払えず、事実に即した推測ができない」という仮説を検討することを難しくしているといえる。特に、文章や単語を刺激とした課題では、“オンライン”の解釈で問題となる社会的状況における刺激に対する反応を測定しきれていない可能性があり、生態学的妥当性を高めた上でさらなる検討を行う必要性があるといえる。

また、従来の研究では社会不安の程度により参加者を群分けして検討を行い、個人特性的な社会不安が高い者は解釈バイアスを持つという相関関係が示されてきた。しかしながら、個人特性的な社会不安と解釈の関連を見ているだけでは、解釈バイアスが社会不安の維持に対してどのような機能を果たすのかについて明らかにすることはできない。

そのため、解釈バイアスが、いわゆる状態不安とされる、社会的状況において喚起される不安にどのような影響を与えるかについて検討することが必要であると考えられる。解釈バイアスが社会的状況に依存する不安状態にどのような影響を与えるのかについて実証的な検討を行った研究は見受けられない。解釈バイアスを持つことが、社会的場面を解釈している時の状態不安や後続の類似場面への予期不安にどのような影響を与えるのか検討することは、解釈バイアスに焦点を当てた介入を行う上で必要である。

したがって、先に指摘した生態学的妥当性の高さを保証した上で、社会不安と解釈バイアスの関連性について状態不安の変化を考慮した実験的検討を行うことを目的とした。

【方　法】

参加者

首都圏に在住する大学生197名（男性93名、女性104名；平均年齢＝21.0±1.43歳）を対象として、Fear of Negative Evaluation Scale 日本語短縮版[14]（以

下FNE短縮版）を用いた、自己記入式質問紙調査を実施した。その結果、サンプル母集団の平均値は40.3±11であった。得点がサンプル母集団の平均値よりも高い、もしくは低く、実験参加に同意が得られた19名（男性11名、女性８名）を実験参加者とした（社会不安傾向高群：FNE短縮版平均値50.1±5.16、社会不安傾向低群：FNE日本語短縮版平均値29.9±7.08）。

実験計画

実験参加者の社会不安傾向２群（高群、低群）を参加者間要因、解釈の感情価の３（ネガティブ、ニュートラル、ポジティブな解釈）、測定時期３（１回目の課題教示後、スピーチ課題後、２回目の課題教示後）を参加者内要因とした。

スピーチ課題

実験参加者はスピーチ課題を行った。スピーチ課題のテーマは「大学生活について」とし、３分間のスピーチを求めた。スピーチ課題の前には、話す内容について考える時間が３分間与えられた。スピーチ課題の後、質問紙への回答を求め、スピーチの聞き手の行動についての評定を行った。

実験刺激

従来の解釈バイアスにおける検討で用いられてきた方法は、日常生活の反映という点では生態学的妥当性が低いという問題点から、本研究では、実際に評価しながらスピーチを聞く聞き手を実験刺激とした。聞き手は、金井[15]によって抽出された５つのあいまいな行動を行った（「髪をかきあげる」、「頭をかく」、「ほおづえをつく」、「脚を組む」、「せきばらいをする」）。これらの行動を実験協力者である聞き手４名（男性２名、女性２名）がそれぞれ35秒間ずつ遂行した。

手続き

実験は個別に行われた。参加者は実験室に通された後本実験の説明を受け、参加に関する承諾内容を確認の上承諾書を作成し、本実験の詳細な教示へと進んだ。健康アンケート、SDS、STAI-Sへ回答し、３分間の思考時間に続いた。その後、実験協力者である聞き手が入室し、スピーチ課題を行った。スピーチ課題後、実験参加者と聞き役が同じ部屋にいる状態でそれぞれ違う質問紙（STAI-Sを含む）への記入を行った後、聞き役は退出した。実験参加者には、回答終了後リラクセーションの音刺激として「美しく青きドナウ（シュトラウス）」を３分間呈示した（「美しく青きドナウ（シュトラウス）」は、ポジティブ気分を誘導する音楽であると指摘されている[16]）。３分間の休憩後、実験者はもう一度２回目のスピーチ課題を課すとの教示を実験参加者に行い、STAI-Sへの回答を求めた。その後、実際は教示通り２回目のスピーチ課題を行う必要はないことをディブリーフィングし、実験を終了した。手続きの流れをFig. 1に示す。

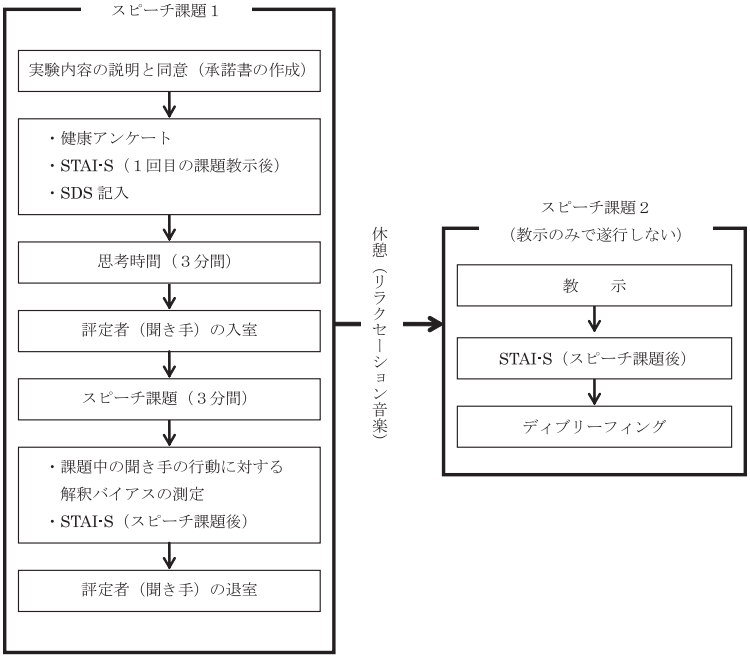

Fig. 1　実験手続き

従属変数

①聞き手の行動に対する解釈

金井[15]を参考に聞き手の各行動を掲げ、それぞれの行動に対して以下の教示をもとに自由記述を求めた。「スピーチをしている間、あなたはその行動についてどのような印象を持ちましたか？あなたの考えたこと、思ったことを全て自由に書いてください。文法や誤字脱字を気にしないで思いつくままに書いてください。」得られた自由記述は、１文ずつの単位として分類し、臨床心理学を専攻する大学院生１名、大学生１名によってコーディングされた。コーディングに用いたカテゴリーは、金井[15]で用いられたものを使用した（Table１）。評定の一致率を算出したところ、88%であった。一致しない項目については、その項目を挙げた被験者を同定できないようにした上で、実験者によるコーディングを行い、一致するコーディングを採用した。

②状態不安（１回目の課題教示後、スピーチ課題後、２回目の課題教示後）

STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版[17]のうち、A-State尺度20項目を用いた。

統制する共変量

解釈バイアスは抑うつにおいても認められており[18]、抑うつ傾向を統制した上で解釈バイアスを検討する必要がある。したがって、実験参加者に自己評価式抑うつ性尺度[19]（以下、SDS）への回答を求め、統制する共変量として用いた。

Table１　コーディングに用いたカテゴリー[15]

カテゴリー	カテゴリーの内容	カテゴリーの詳細	下位カテゴリー	下位カテゴリーの内容
1	聞き手に関する解釈	聞き手のパフォーマンス，見た目，情動状態に関する解釈 例）聞き手の人はすごく眠そうに見えた。	P N 中	ポジティブ ネガティブ ニュートラル
2	自己を評価する解釈	自分自身や自分のパフォーマンスに関する解釈 例）自分の話す内容がつまらないのかと思った。	P N 中	ポジティブ ネガティブ ニュートラル
3	自己の情動	緊張，不安，うれしさなどに関する記述 例）その行動を見てとても不安が高まった。	P N 中	ポジティブ ネガティブ ニュートラル
4	聞き手からの評価に関する解釈	聞き手が自分のパフォーマンス，見た目，情動状態について考えたことに関する記述 例）評定者は私のことを緊張しているなぁと思っているだろう。.	P N 中	ポジティブ ネガティブ ニュートラル
5	課題に関する考え	スピーチすることに関する考え 例）いきなりスピーチをと言われても上手くできる訳がない。		
6	planning	課題に関する考え以外の，緊張などに対する対処法略に関する考え 例）スピーチに集中しようと考えた。	P N	積極的 消極的
7	聞き手に対する要求	聞き手にこうして欲しかったという記述 例）もう少し興味を持って聞いて欲しいと思った。		
8	検出不可	気づかなかったという記述 例）この行動は分からなかった。		
9	その他	上述のカテゴリーにあてはまらない考え		
10	忘れた	忘れてしまったという記述 例）あまりよく覚えていない。		

※「ポジティブ」とはパフォーマンスを高めると思われる解釈を指し，「ネガティブ」とはパフォーマンスを低下させると思われる解釈をさす。

【結　果】

参加者の群分けに関する操作チェック

FNE短縮版の得点を従属変数とし、社会不安傾向群を要因とした１要因分散分析を行ったところ、群の主効果が有意であった（F [1, 18] =49.56, p<.01）。したがって、参加者の群分けは適当であったと考えられる。

社会不安傾向群における解釈について

聞き手に関する解釈と分類され、さらにそれぞれの感情価にコードされた解釈の数を算出した。解釈の数を従属変数、社会不安傾向群、解釈の感情価を要因とし、SDS得点を共変量とした２要因共分散分析を行った。その結果、社会不安傾向群と解釈の感情価の交互作用が有意だった（F [2, 32] =5.56, p<.01）。単純主効果の検定を行ったところ、ニュートラルな解釈における群の単純主効果（高群＞低群、p<.05）と低群（ニュートラル＞ポジティブ、ネガティブ、いずれもp<.05）と高群（ネガティブ＞ポジティブ、p<.05）における解釈の感情価の単純主効果が有意であった（Fig.２）。

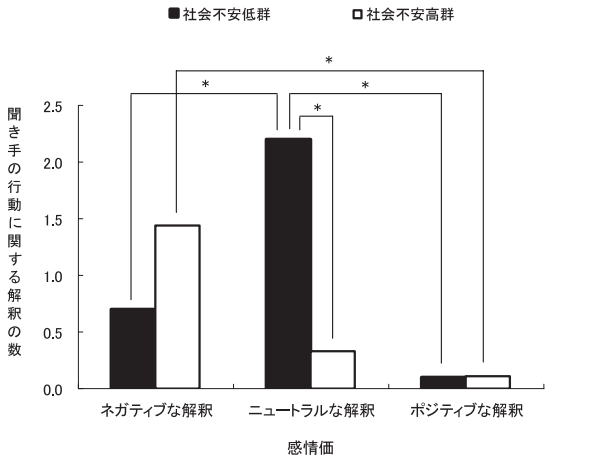

Fig.２　社会不安高・低群における感情価ごとの解釈数

したがって、社会不安傾向高群は、低群に比べて聞き手の行動に対するニュートラルな解釈が少なかったことが明らかにされた。また、社会不安低群では、ポジティブ、ネガティブな解釈と比較して、ニュートラルな解釈が多かったことが示され、最も多くニュートラルな解釈をしていたことが分かった。さらに、社会不安高群では、ポジティブな解釈よりもネガティブな解釈が有意に多く、ネガティブな解釈が多いことが示された。

社会不安傾向群における状態不安の変化について

STAI-S得点を従属変数、社会不安傾向群、測定時期を要因とした２要因分散分析を行った（Fig.３）。その結果、社会不安傾向群の主効果（F [1, 17] =15.02, p<.01）、群と測定時期の交互作用が有意だった（F [2, 34] =4.51, p<.05）。単純主効果の検定を行ったところ、全ての時期における群の単純主効果（高群＞低群、いずれもp<.05）と高群における測定時期の単純主効果が有意であった（２回目の課題教示後＞スピーチ課題後＞１回目の課題教示後、２回目の課題教示後＞１回目の課題教示後、いずれもp<.05）。

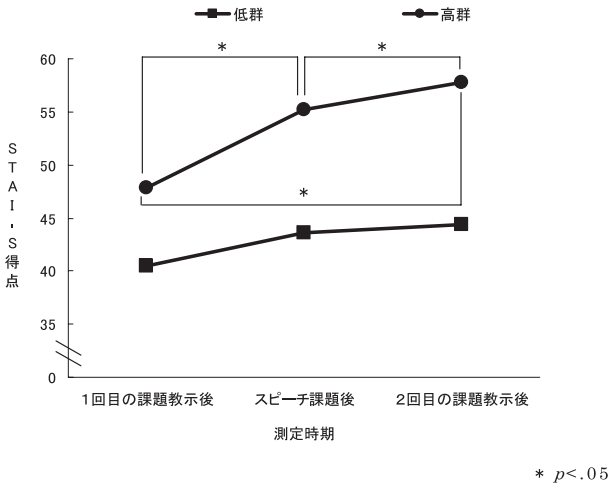

Fig.３　社会不安高・低群における測定時期ごとの状態不安

したがって、測定時期にかかわらず、社会不安傾向高群は低群よりも高い不安を感じていたことが示された。さらに、その中でも社会不安高群は測定時期によって不安の高さに差異があり、実験の時系列に沿って高い不安を報告したことが明らかになった。しかしながら、低群においてはそのような差異は認められなかった。

【考　察】

本研究では従来の方法よりも生態学的妥当性を高めた方法を用い、社会不安における“オンライン”の解釈を検討することを目的とし、検討を行った。その結果、ニュートラルな解釈において顕著な結果

が示され、社会不安の低い人は、あいまいな刺激を中性的にとらえることができていたが、社会不安の高い人はできなかったことが示唆された。これは、金井ら[7]の知見と一致している。

本実験で用いられた実験刺激は、ニュートラルに解釈されるのが最も一般的であるポジティブでもネガティブでもない多義的な刺激を用いている。したがって、社会不安傾向低群が最も多くニュートラルな解釈をしたのは、現実的で妥当な判断だといえる。一方で社会不安の高い参加者はニュートラルな解釈が著しく少なかった。これは、Hirsch & Mathews[10,11]で指摘されたような“オンライン”の解釈をしていないという現象であると解釈される。つまり、実験刺激を入力し現実的で妥当な判断をした社会不安の低い参加者とは対照的に、社会不安の高い参加者は外界の刺激を取り入れずに“オフライン”の解釈を行っており、その結果、ニュートラルな解釈が少なくなった可能性がある。

また、社会不安傾向高群はネガティブな解釈を最も多くしていたことが明らかにされた。Hirsch & Mathews[10,11]の知見と、用いた実験刺激がニュートラルに解釈されるのが妥当であるという点を考慮すると、この結果は“オフライン”の解釈によるものだと考えられる。すなわち、あいまいな刺激である他者の行動を取り入れず、自らのネガティブな信念やイメージによる影響を受けた解釈を生成したと推察される。

金井ら[7]や本研究で得られた結果に対する考察においては、従来の研究結果や用いた刺激の特性を考慮することで、上記のような予測が可能になると考えられる。しかしながら、本研究の結果のみからでは、“オンライン”の解釈と“オフライン”の解釈を明確に区別することは困難である。

“オンライン”と“オフライン”を分ける重要な要素は、外界の刺激に遭遇した時に、その刺激を取り入れ、その情報に沿った解釈を行うかどうかという点であり、本研究で用いた方法は、その刺激となる外界の刺激を課題の中に設定しているという点で大変有効な側面を持っている。しかしながら、結果として表現されたものがどちらの解釈を示すのかについて、独自の基準からは明確に分けることが難しく、それを従来の研究との整合的な理解の中から得る必要があるという点については、依然として問題が残っている。

一方で、Hirsch & Mathews[10,11]の用いた語彙決定課題は、生態学的妥当性の高い刺激、あるいは実際に参加者に“オンライン”の解釈、データ駆動型の処理をさせるための現実的な刺激を呈示するという点では欠点を持つ。しかしながら、即時判断を求めて反応時間を測定するという方法は、より参加者が刺激に出会っている最中の反応を取り出す(“オンライン”処理に従事している時の反応を測定する)ことができるという利点を持っている。

したがって、“オンライン”の解釈の検討においては、測定方法の効用と限界を十分に理解し、目的に応じて方法を選択する必要があると考えられる。さらに、本研究のように現実場面に近い刺激を用いた検討を行う場合には、生態学的妥当性を高めるだけではなく、結果を解釈するためのアセスメントを充実させる（たとえば、本当に外的刺激に注意を払っていないかを確認するために注意の測定を行う）ことも有用であると考えられる。

そして、本研究における生態学的妥当性の高さについては、従来の方法よりも比較的高い妥当性を保証できたと考えられる。Amir & Foa[20]では、社会的場面においては、他者から受けるフィードバックはあいまいであり、個人は他者の行動から自分の振るまいが適切であったかどうかということや、他者の承認が得られたかどうかについて解釈しなければならないと指摘している。すなわち、社会的場面において解釈している刺激は他者の行動であり、日常生活における解釈バイアスの測定では、文字を用いた刺激よりも、実際の場面を用い、他者の行動を刺激として呈示する方が生態学的妥当性が高いといえる。

さらに、文章で呈示された場面を想起することによる検討では、個人間のイメージ能力の差の影響を受けることが考えられるため、本研究は、他者の行動を刺激として呈示することで比較的高い妥当性を保証することを試みた。しかしながら、解釈バイアスの測定においては、さらに生態学的妥当性の高い方法を考える必要がある。

また、Hirsch & Mathews[10,11]は、社会不安の低い人がポジティブな“オンライン”の解釈を行っていた一方で、社会不安の高い参加者は“オンライン”の解釈を行っていなかったことから、“オンライン”

での解釈の欠如、特にポジティブな解釈がされないことが社会不安を特徴づけていると示唆している。しかしながら、金井ら[7]と本研究の結果では、社会不安の高い人における“オンライン”での解釈、特にニュートラルな解釈の欠如を明らかにした。この差異に関しては、Hirsch & Mathews[10,11]の語彙決定課題による検討では、ネガティブな解釈とポジティブな解釈の測定にとどまり、ニュートラルな解釈に関する査定は行われていないことが結果の不一致の原因と考察される。実際に聞き手の前でスピーチ課題を行うという極めて現実場面に近い実験刺激を用いた金井ら[7]と本研究の両結果が一致したことは、“オンライン”の解釈において、ニュートラルな解釈が重要であるとの示唆であると考えられる。したがって、治療場面において介入を行う際には、刺激を現実的に解釈するように介入することが重要であることが示唆された。

本研究の結果と従来の研究をあわせて考えると、“オフライン”の解釈においては社会不安の高い人はネガティブな解釈、また、“オンライン”の解釈の欠如、特に社会不安の低い人と比較するとニュートラルな解釈の欠如が社会不安の特徴であると指摘することができる。“オフライン”の解釈において統合的な知見を示したHuppert et al.[13]は、“オンライン”の解釈に対する検討を重ねることで、社会不安に関する２つの処理プロセスにおける解釈の違いを明確にできると述べており、本研究がその役割の一端を担っていると考えられる。

もうひとつの目的として、解釈に関連して状態不安がどのように変化するかについて検討することを掲げて検討を行った。その結果、社会不安傾向高群では、１回目の課題教示後よりスピーチ課題後で状態不安が高く、さらにスピーチ課題後より２回目の課題教示後で状態不安が高かった。一方、低群では同様の差異は認められなかった。社会不安傾向の高い参加者において、１回目の課題教示後よりスピーチ課題後で状態不安が高くなったことに関しては、上述のような解釈のバイアスが生じたことにより、スピーチ課題後の不安が高まったと考えられる。この点は、スピーチという課題が社会不安を持つ人にとって不安を喚起させるものであるからであるという解釈も可能であるが、課題によって喚起される不安は社会不安傾向群の主効果が有意だったことに表現されており、歪んだ解釈が不安を高めていることが示唆されたといえる。

また、社会不安の高い参加者においてスピーチ課題後より２回目の課題教示後において不安の程度が高まったことが示された。これは、スピーチ課題後の測定と２回目の課題教示の間には、ポジティブな気分を誘導する音楽を伴う休憩をはさんでいるにもかかわらず、２回目の課題教示後においてさらに高い不安が測定されたことになる。これは、解釈バイアスによって生起された不安が下がりにくく、気分誘導も妨害的に働かずに不安が残っていたと解釈できる。さらに、その高い不安は維持されていただけでなく、より高く測定されたことから、後続の類似したスピーチ場面へ入る際に、先行経験における解釈や不安を想起し、予期不安が高められたのではないかと考えられる。したがって、解釈バイアスは、解釈される対象となる状況において不安を高めるだけでなく、後続の類似場面にもネガティブな影響を与えることが明らかにされた。

しかしながら、本研究では休憩後の状態不安を測定していないことから、その時点における不安の継時的変化を測定できていないという限界がある。また、社会的状況における解釈が状態不安に与える影響を検討するためには、解釈の操作を行って、それに追随して変化する不安を検討することが必要であると考えられる。

そして、Clark & Wells[1]やRapee & Heimberg[2]による認知モデルでは、社会不安の発症と維持について様々な要因を含んでおり、社会不安の高い人は、予期不安を抱く傾向にあることも指摘している。すなわち、社会不安の高い人は将来起きるかもしれない社会的出来事について、ネガティブな予測をしやすく、その予測が回避行動につながることで維持要因の役割を果たすと理解される。このような処理について、Wells[21]は、社会不安の高い人は、社会的出来事の後にpost-event processingに従事することを指摘している。つまり、社会的出来事を経験した後にも、その出来事についての処理を続けているということである。社会不安障害におけるpost-event processingの実証的な研究は、近年行われ始めたばかりであり、本研究において示された解釈バイアスが状態不安に与える影響とも関連が深いと考えられる。今後はこのような視点も考慮した統合的

な検討が望まれる。

【文　献】

1）Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.) *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment.* New York: Guilford Press. Pp.69-93.

2）Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy,* 35, 741-756.

3）Amir, N., Foa, E. B., & Coles, M. E.(1998). Negative interpretation bias in social phobia. *Behaviour Research and Therapy,* 36, 945-957.

4）Stopa, L. & Clark, D. M. (2000). Social phobia and the interpretation of social events. *Behaviour Research and Therapy,* 38, 273-283.

5）金築　優・伊藤義徳・山田幸恵・境　泉洋・青山幸司・金井嘉宏・小山徹平・増田智美・石川信一・腰みさき・佐藤さやか・吉田諭江 (2002). 認知行動療法における認知の測定法：情報処理パラダイムに基づく測定法　早稲田大学臨床心理学研究，２，59-68.

6）生和秀敏　(2002).　不安･抑うつの認知的バイアスに関する認知情報論的研究　平成12年度－平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書　(課題番号12610128)　未公刊

7）金井嘉宏・笹川智子・陳　峻雯・嶋田洋徳・坂野雄二 (2003). 社会不安と他社の行動に対する解釈バイアスの関連性　日本行動療法学会第29回大会発表論文集, 206-207.

8）五十嵐友里･嶋田洋徳　(2005).　社会的場面における解釈バイアス　早稲田大学臨床心理学研究, ４, 3-14.

9）Constans, J. I., Penn, D. L. Ihen, G. H., & Hope, D. A. (1999). Interpretive biases for ambiguous stimuli in social anxiety. *Behaviour Research and Therapy,* 37, 643-651.

10) Hirsch, C. R., & Mathews, A. (1997). Interpretive inferences when reading about emotional events. *Behaviour Research and Therapy,* 35, 1123-1132.

11) Hirsch, C. R., & Mathews, A. (2000). Impared positive inferential bias in social phobia. *Journal of Abnormal Psychology,* 109, 705-712.

12) Bond, C. F., & Omar, A. S. (1990). Social anxiety, state dependence, and the next-in-line effect. *Journal of Experimental Social Psychology,* 26, 185-198.

13) Huppert, J. D., Foa, E. B., Furr, J. M., Filip, J. C., & Mathews, A. (2003). Interpretation bias in social anxiety: A dimensional perspective. *Cognitive Therapy and Research,* 27, 569-577.

14) 笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳･坂野雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み－項目反応理論による検討－　行動療法研究, 30, 87-97.

15) 金井嘉宏　(2003). 社会恐怖と対人恐怖症の認知バイアス　早稲田大学大学院　人間科学研究科修士論文 (未公刊)

16)谷口高士 (1999). 音楽作品の感情価測定尺度の作成および多面的感情状態尺度との関連の検討　音楽と感情　―音楽の感情価と聴衆者の感情的反応に関する認知心理学的研究―　４章　北大路書房

17) 清水秀美・今栄国晴　(1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版 (大学生用) の作成　教育心理学研究, 29, 348-353.

18) Nunn, J. D., Mathews, A., & Trower, P. (1997). Selective processing of concern-related infomration in depression. *British Journal of Clinical Psychology,* 36, 489-503.

19) 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究　精神神経学雑誌, 75, 673-679.

20) Amir, N., & Foa, E. B. (2001). Cognitive biases in social phobia. In Hofmann,S.G., & DiBartolo, P.M. (Eds.) *From social anxiety to social phobia : multiple perspectives.*

Boston, MA : Allyn and Bacon, Pp.254–267.
21) Wells, A. (1997). *Cognitive therapy of anxiety disorders: a practice manual and conceptual guide.* Chichester, UK: Wiley.